

専用 Android 端末の苦難の道

酒井 寿紀 (Sakai Toshinori) 酒井 IT ビジネス研究所

苦難の道を歩む電子書籍端末

先月号の本コラムで、Android の改変をグーグルが統制する問題について記した。しかし、Android の改変には、これとは直接関係のない問題も存在する。ここでは、電子書籍端末の事例を 3 件取り上げよう。

米国最大の書店チェーンであるバーンズ・アンド・ノーブル(B&N)は、2009 年 11 月に Nook(ヌック)という、白黒の電子ペーパーを表示画面に使った電子書籍端末を発売した。そして、同社は 2010 年 11 月、その後継機の Nook Color を、249 ドル(約 1.9 万円)で発売した。表示画面は 7 インチのカラー液晶で、OS は Android であり、汎用のタブレットに近い構成だが、カメラや GPS(位置センサ)などは付いていない。そのため、電子書籍の購読、ウェブの閲覧、ビデオの視聴などはできるが、インターネット上で Android のアプリケーション・プログラム(AP)を提供している「Android マーケット」から自由に AP を取り込んで実行することはできない。

ところが、この Nook Color に手を加えて、Android マーケットの AP を自由に使えるように改造する情報が、2010 年中にインターネット上に掲載された。これによって、使いたい電子メール・クライアントや電子書籍リーダーなど、汎用タブレットのいろいろな AP が使えるようになった。

B&N は、その後 2011 年 11 月に Nook Tablet という上位製品を Nook Color と同一価格で発売した。この製品に対して

は、発売の 4 日後に Android マーケットを使えるように改造する情報が出回ったという。

アマゾン は 2007 年に Kindle という電子ペーパーを使った電子書籍端末を発売し、今日の電子書籍の隆盛の口火を切った。その後、同社は 2011 年 11 月に、その上位製品で OS に Android を用い、7 インチの液晶パネルを使った Kindle Fire を 199 ドル(約 1.5 万円)で発売した。

これも、アマゾンの電子書籍の購読、ビデオの視聴、ウェブの閲覧などはできるが、Android マーケットの AP を使うことはできないものだった。しかし、発売の 2 日後には、Android マーケットを使えるように改造する方法がネット上で公開されたという。

アマゾン は Android マーケットへのアクセスを妨害していたが、こういう状況を踏まえて 2011 年 12 月下旬に同社はこれを止めた。これで直ちに Android マーケットの AP が使えるようになったわけではないが、一歩前進である。

シャープ は 2010 年 12 月に GALAPAGOS という Android を使った電子書籍端末を発売した。10.8 インチと 5.5 インチのカラー液晶パネルを使ったもので、価格はそれぞれ 54,800 円、39,800 円だった。これもカメラや GPS がない電子書籍専用の端末で、当初は Android マーケットに対応していなかった。しかし、同社は 2011 年 7 月、Android マーケットに対応するように機能を拡張した。そのため、カメラ等の機能を除けば汎用タブレットと変わらなくなった。

そして、同社は 2011 年 9 月にこの当初の GALAPAGOS の販売を打ち切った。

同社は 2011 年 8 月に、7 インチの液晶パネルを使い、カメラ、GPS など、汎用のタブレットと同等の機能を備え、Android マーケットも使える新しいタブレット端末のイー・アクセスへの提供を始めた。無線 LAN 接続のみで、3G 回線への接続はなく、価格は 44,800 円である。

その後同社は、同年 11 月に上記と同等の仕様で WiMAX の通信機能を追加した製品を同じ価格で発売し、現在 KDDI 系の UQ コミュニケーションズが販売している。

これらの事例が示すもの

まず、アマゾンやシャープの事例は電子書籍専用のタブレットは存在が困難になったことを示している。それは、電子書籍の販売を増やすためには、汎用のパソコン、タブレット、スマートフォンなどで読めることが要求され、アマゾン、ソニー、B&N、シャープなどの電子書籍がそうなったためだ。

そして、汎用タブレットは価格競争でどんどん安くなり、電子書籍専用のタブレットは、よほど安くしないと売れなくなった。そのためアマゾンや B&N は非常に安い価格を設定した。しかし、機能に

制約はあるが、これを汎用タブレットに改造する方法が公開されたため、結果的に汎用タブレットに近い製品が 200～250 ドルという安い価格で入手できるようになった。

また、シャープも電子書籍専用のタブレットの販売を中止し、汎用タブレットの販売に切り換えた。

今後、電子書籍専用の端末として残るのは、電子ペーパーなどを使ったごく安いものだけになるのではないだろうか？ 現在アマゾンは、読書中以外に広告を表示する端末を 79 ドル(約 6,100 円)で販売している。

電子書籍端末のメーカーは、コモディティ化した汎用タブレットの市場で厳しい価格競争に巻き込まれている。

そして、ソフトの改変だけによる専用端末化は不可能なことも分かった。

Android はソースコードが公開されているため、Android を使った電子書籍端末は次々と汎用化された。ハードの機能に制約があり、保証上の問題もあるが、それでも構わないユーザーもいるので、こういう動きは今後も止まらないだろう。Android の改変による使用目的の変更を防止するためには、例えば表示に電子ペーパーを使うなど、ハードウェアを特殊なものにするしかないと思われる。